



学校だより

平成30年度 8・9月号

～ひとがすき まちがすき いわさきの子～
横浜市立岩崎小学校 電話 331-5123 FAX 331-5343

夏に思う

校長 杉原 龍司

今年も夏休みが終わりました。子どもたちにとって、どんな夏休みだったでしょうか。

さて日本にとって8月は、戦争について考え、伝えていく月でもあります。8月6日、9日と続いた原爆の投下、そして15日の終戦、と73年が経た今日でも日本人にとって8月は、日本国憲法を持ち出すまでもなく不戦の誓いを新たにする月であると思うのです。しかし、残念ながら日本のほとんどの学校は8月が夏休みの真っ最中で、先の戦争に関する伝承の意識も機会も弱いように思います。

かっていた学校で広島と長崎出身の先生が口を揃えて、

「こちら(横浜)に来たら、8月6日も9日も、「普通の」日でした。」

と言っていたのが印象的でした。そういえばかつて8月のある日、四国を旅行して香川県丸亀市で道を歩いていると、突然市役所のサイレンが大音量で鳴り出したのです。しばらく鳴り続けていることに不審に思って、ふと腕時計に目を落として気がつきました。「ああ、広島に原爆が投下された時間だ。」ここでは今でもこうやって瀬戸内海を挟んで対岸の広島に原爆のことが伝承され続けているのだと改めて感慨を覚えると同時に自分の中でそれが「忘れられている」ことにその時気がついたのでした。

私は戦争世代ではありませんが、祖父母、父母世代の戦争の記憶を色濃く感じて育ってきました。祖母は原爆投下時、広島市の山一つ隣の呉市に在住でした。生前の祖母に原爆のことを聞くと、投下の時のピカッと光ったという光の強さよりも、翌日広島市内から避難して来た人々が、焼けただれて垂れ下がった腕の皮膚が体に着かないよう両手を前につき出しながら、(広島弁で)「すんませんが、水を一杯くんさい、」と言っていたのがかわいそうだったと繰り返して話していました。

小学5年生だった母は富山に学童疎開で避難し、若い女性の先生がベテランの女性の先生に「この非常時に(口)紅が赤すぎます！」と叱られて泣いていたのを覚えていたと言います。

今は亡き父は疎開先で空襲に遭い、長屋の押し入れに隠れたところ薄い壁一枚向こうの隣の部屋に爆弾が落ちたものの不発だったとのこと、また米軍の戦闘機に機銃掃射され、翼の左右につけている機銃から発射された弾が体の左右を挟むように地面に次々と着弾したと言い、

「映画だと格好よく逃げているけれど、実際に撃たれると足がすくんで逃げられたもんじゃないよ。」

とも言っていたのを覚えています。あの時の機銃弾が一発でも当たっていたら、もしあの爆弾が爆発していたら、今の私はこうしてここにいないと思うと不思議な気がしますが、戦争になればそんな幸不運など日常的に起こっていたに違いないでしょう。

飛行機による爆撃もなく、口紅が派手すぎると叱られることもない平和な日本の、この日々の大切さをせめて、夏だけでも考え続け、伝え続けなければならないと改めて考える次第です。